





第7章

農業に未来を託す島

喜界島

石黒悦爾
(鹿児島大学農学部)

桑原季雄
(鹿児島大学法文学部)

植村義彦
(喜界町役場経済課)



喜界島は奄美大島の東北端に位置し、鹿児島から380km、名瀬市から69kmの太平洋上にある。島の面積は57km²で、北東から南南西に長く、東西7.8km、南北の最長14km、周囲約49kmである。ほぼ島全体が第4紀石灰岩でおおわれ、島の大半は隆起サンゴ礁で

ある。また、一年間に1.5～1.9mmずつ隆起しているともいわれる。大陸と陸続きののち、いったん海中に沈降し、珊瑚礁の隆起で再び島になったことから、古代から生き続けている動植物相はほとんどみられない。毒蛇ハブのような害虫もなく、また人を寄せつけない自然の



海岸近くの集落 ©桑原季雄

険しい地形や景観もない。人間にとってはたいへんやさしい感じの島であるといえる。

集落は主に海岸線に沿って展開し、各集落の後背地は農地となっている。島の中央東よりを南北に走る百之台丘陵は最も高いところで標高 225m、東から西に向

かってゆるやかに傾斜する。概して平坦な島で、河川はほとんどない。気候は温暖で、1966 年から 1995 年までの過去 30 年間の平均気温は 22.4℃、平均降雨量は 2,230mm である。

人口は戦前において 2 万人を超えていたが、戦後は急速に減少し、現在は 1 万人を割り込んで 9,296 人である。人口の約 3 割は島の西南部の湾・赤連地区に集中し、他のほとんどの集落では過疎化・少子高齢化が著しい。

喜界島は 1466 年(文正元年)の琉球王の喜界島討伐からおよそ 150 年間琉球王の統治下にあったが、1609 年(慶長 14 年)の島津藩の琉球征伐の結果、琉球から分割され、1871 年(明治 4 年)の廃藩置県まで、約 260 年の長きにわたって島津藩に属した。戦後は 1946 年(昭和 21 年)米軍によって日本本土と行政分離され、およそ 8 年の間、米軍占領下に置かれたが、1953 年(昭和 28 年)12 月 25 日、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島とともに祖国復帰を実現した。

源平来島伝説

喜界島には源為朝をはじめとして、僧俊寛や平家の落人に至るまで多くの来島伝説がある。源為朝が最初に着いたのが喜界島の小野津といわれている。為朝は島の近くまで来ると、住民の存在を確かめようとして狩股の矢を放ち、上陸後、その矢を抜き取ってみると、その後から清水が湧き出した。これが「カリマタの泉」の伝説である。やがて為朝は西の方に大きな島影を見て、大島に渡った後、さらに船出して徳之島、沖永良部を経て、琉球に到達したとされる。

次に平家来島伝説であるが、長門の壇ノ浦の合戦の前夜、豊前の国から九州南表へ逃れた平家の一団は、屋久島を経て喜界島に上陸した。そこで3年滞在しているうちに、近くに大きな島があるのを発見し、主のいない島だということで、三方から船を乗りつけて攻めた。全島の平定がなると、資盛は島の西南部、加計呂麻島の諸鈍に城を構え、有盛は北部、名瀬市の浦上に居住し、行盛は東部、龍郷町の戸口に城を築いたとされ

る。

僧俊寛の来島に至っては、その信憑性をめぐって考古学的調査まで行われた。こうした源平の来島伝説の背景には、歴史の表面には表れない武士や倭寇の来襲があったことが想像される。後の倭寇の中心地の一つは薩摩の坊ノ津で、彼らは南西諸島を経て、広東や福建などに達した。中世奄美にも、武器を持った一団が幾度か上陸したとみられ、こうしたことが、源平伝説が発生し助長されてきた背景にあると考えられている。

平家落人の伝説を持つ地は、全国に60～70カ所以上もあるといわれている。これらの伝説は、悲劇的な最後を遂げた英雄に対する愛惜の情、遠い都への敬慕の情、自分の家柄を高貴なものに結びつけて権威を誇ろうとする心情などが大きく作用しているとされる。特に奄美諸島においては「ネリヤ」という、海の彼方の神境に対する信仰があったため、こうしたことも源平伝説を育てるにはとても都合がよかったのではないかと考えられている。

琉球からの来島者 ノロ

奄美の文化は、固有の基層文化に、源平伝説にみるような日本本土から渡来した人たちの影響を受けた。しかし、一番影響の大きかったのは琉球時代にもたらされた様々な琉球文化であろう。この時代、衣食住を主とする奄美の生活文化はすべての面で琉球化された。しかし、同じ琉球文化でも古典音楽や古典舞踊のような宮廷芸能は伝わらなかった。そのかわり庶民芸能と実生活に即した物質文化や調理法、商法、漁法などが伝えられた。

そもそも琉球王が奄美の島々を支配下におさめた一番の目的は、貿易中継地としての良港と漁業権を得るためであったとされ、土地支配などは考えていなかった。琉球では古くから功勞のあった者を地方に任官するとき、その妻や姉妹、地方豪族の女子を女の神官ノ

ロ(祝女)に任命して派遣し、当地の一切の祭祀を任せるとともに、政治的にも利用した。彼女たちを直接支配し各地へ派遣したのは首里の^{きこえのおおきみ}聞得大君であった。このように、当時の琉球王はノロの神職組織によって住民を宗教的に掌握したのであった。また、ノロたちは、彼女たちが従っている首長のウナリ神(守護神)として、百姓や航海者の信仰を獲得し、また、首長のため、信仰者から貢租を集める者として、積極的な役割をになっていたとされる。喜界島を含む奄美群島各地では今日でも実際にノロの末裔が存在するところもあれば、ノロが使ったとされる神具などが残っている集落も多い。



石垣に挟まれた集落内の小道 ©桑原季雄

薩摩の来島者 代官と遠島人

薩摩時代には代官が来島し、砂糖専売制を行って島民を重税の苦しみに追いやった。薩摩藩は1753～1755年に、幕府の命を受けて木曾川改修の難工事を行い、大変な借金をした。その上、藩主島津重豪の派手な生活により、もっと大きな借財を作った。その苦しい藩の財政の建て直しの財源として、植民地奄美の砂糖に注目したのであった。

しかし、薩摩から来島してきた人間は、島民を「さとうきび地獄」に追いやった悪代官ばかりではなかった。薩摩藩は、記録によれば1789年から奄美諸島を流刑地と定めた。島流しされたのは主に、政治犯のような人たちで、罪の重さによって、軽い方から大島、喜界島、徳之島、沖永良部島と、だんだん遠いところに流された。この島流しを「遠島」といい、流人たちを「遠島人」といった。遠島人の中には高学の者も多く、奄美の史料として大変貴重な『南島雑話』の著者名越左源太なごやさげんたや後の文学博士

しげのやすつぐ
重野安綱などが大島に遠島人として来島した。

喜界島に遠島された薩摩藩士の中には、島民の教育や文化の発展に貢献した者が多くいる。1809年に遠島になって来島した藩士に偉大な学者伊地知季安いぢちきあんがいた。島民は季安の学識の高いのを知ると、彼のために小さな居宅を作って子供たちの師匠として厚遇したという。こうして遠島から3年後に許されて帰藩するまで、季安は島民の啓蒙に大きく貢献したのであった。

また、これより先、寛延の頃えびはらしょうぞう(1748 - 1751)に海老原庄蔵以下11名の者が喜界島に流されている。彼らは密会中にキリシタンバテレンの嫌疑で検挙され、1750年(寛延3年)12月25日に流罪の刑で喜界島に遠島してきた。海老原も博学の人で、他の流人と同じく島の児童たちに読み書き習字を教え、島民の敬慕の的となったが、その生涯を淋しく孤島で終えたという。

幕末の1862年4月には、薩摩藩士村田新八むらたしんぱちが遠島人として来島した。村田は、島津久光公の不興を買って徳之島と沖永良部に相次いで島流しになった西郷隆

盛の同志で、喜界島に遠島となり、当時の湾村に住んだ。村田もまた、近隣の児童たちを集めて書を講じ字を教え、ときには青年たちの頼みに応じて柔術や相撲を教えた。当時の弟子たちの家には彼の筆になる漢書の教科書が保存されているといわれる。また、村田は和歌をよくし、そのうちの2首だけが、彼の寓居であった喜島桃園家に残っていると言われる。村田は、西郷が帰藩を赦された1864年（元治元年）に西郷と一緒に島を離れた。島民は村田新八の石碑を建て、今なお敬慕してやまない。

このように、薩摩時代の遠島人

で奄美の島民の教育や文化の発展に多少とも貢献した人は西郷隆盛をはじめとして決して少なくない。奄美諸島の遠島人たちは謹慎中の不自由な身でありながら奄美諸島の文化の向上と島民の啓発に尽くした。また、遠くは源平の世から、琉球・薩摩の両時代を通じて、奄美、喜界島には海の彼方から常に多くの来訪者があった。文化や情報は常に外から持ち込まれ続けてきた。この関係は現在でも大きくは変わっていない。しかし、情報化時代の今日、島からも様々な情報が発信されるようになってきた。

農業立島

1970年に策定された「喜界島長期総合振興計画」においてすでに「本町産業の中心は農業であり、その振興を促進するため農業基盤の整備及び農業経営の近代化を図り、高生産性農業を積極的に推進する」と述べられているように、喜界島における地域振興は早い時期から農業を基盤とした

産業振興という考え方にまとまっていた。「農業立島」という言葉も1972年頃から使われるようになった。その基幹作物はサトウキビである。

喜界島の農業振興に大きな自然的制約が二つあった。一つは、土地の基盤整備であり、もう一つは農業用水の問題であった。そのため、当然ながらこの農地整備と農業用水の問題を喜界町における「奄振」事業の中心にすえて最も力を入れた。特に、農業の生産

基盤である圃場整備ほじょうは、農業を地域振興の基盤とする上で急務であった。1998年までに、圃場整備率と農道整備率はそれぞれ88.5%、68.4%に達している。また、農業用水の問題は、緩やかで起伏の少ない平坦な土地と透水性の琉球石灰岩に覆われた地質構造からくる恒常的な水不足にあった。そうしたなか、国営事業による地下ダム建設が浮上し、1973年に喜界地下ダム計画が採択され、1992年に着工し、1999年に地下ダムの止水壁が完成した。現在、用水を送るためのパイプラインと貯水池の設置工事が進んでいる。2010年には県営による末端灌漑施設整備が終了し、完成となる見込みである。

地下ダムの完成によって基幹作物であるサトウキビをはじめとする作物の増収、花き、園芸作物の生産向上が見込まれている。行政はこれら2つの柱、すなわち基盤整備と水資源開発の推進とともに大型機械の導入によって生産規模の拡大や担い手農家の減少および高齢化問題の克服を目指している。



群島一の サトウキビ

喜界島の農業は、農家一戸あたりのサトウキビの耕地面積ならびに10aあたりの収量は奄美群島一である。サトウキビは他の農作物に比べて植え付けや収穫に手



サトウキビ畑をまっすぐ突き抜ける農道（左） 機械化されたサトウキビ工場（右上）
サトウキビの収穫（右下） ©桑原季雄

がかからず気候にも影響されにくい利点から、奄美群島全域で多くの人が従事しており、行政も様々な形でこの産業に力を注いできた。サトウキビは1609年（慶長14年）に、奄美大島大和村の直川智すなおかわらによって製糖法とともに中国福建省から伝来された。沖縄でもそれ以

前にサトウキビが作られていたようであるが、製糖法の伝来は1612年と記録されている。

サトウキビの経済栽培適地は、年平均気温20℃以上で、降霜がなく、生育期に降雨が十分にあり、成熟期には好天と乾燥が続くことが理想とされる。世界の栽培地は

北緯 35 度から南緯 37 度の範囲に分布するが、温度に恵まれた熱帯であっても、乾期と雨期が明瞭な気候でなければ適地とはいえない。干魃や台風、塩害にも比較的強く、干魃と台風が激しい南西諸島において、サトウキビは最大 30% 程度の減収に留まり、適作といえる。また、日照時間が長く、高温多湿条件にあるほど収穫が高まる。ちなみに南西諸島は年降水量が 1,800 ~ 2,500mm もあり、栽培適地の降水量 1,500 ~ 2,000mm に達している。喜界島は年平均気温 21℃ 前後で亜熱帯海洋性気候なのでサトウキビ作りに大変適している。

1995 年現在、第一次、第二次、第三次産業の全就業人口に占める農業就業者数は 28% で、1980 年以降の過去 15 年間ほとんど変化していない。1997 年の統計によると、喜界島の耕地面積の 2,130ha に対して、サトウキビ畑は

1,076ha で、全体の約半分を占めている。また、農家一戸当たりの耕地面積は 1980 年の 1.3ha から 1995 年には 2.1ha と増えている。1989 年に 10 万トンを超えていた生産高は翌年から 10 万トンを割り込み、現在 8 万トン前後で推移している。1996 年の統計で見れば、サトウキビは全農産物生産高 (21 億 6,518 万円) の 74% を占める。喜界町のサトウキビ農業は、10a 当たりの収量、生産量、生産額とそのいずれにおいても奄美群島内の全市町村の中で 1 位であった。

しかし、喜界島の財政は、1997 年度の一般会計統計で見ると、歳入に占める自主財源は 14.2% で、残りの 85.8% は地方交付税等の依存財源である。「農業立島」を目指してはいるものの、財政的には他の奄美の島々と同様、自立経済への道が遠く険しいのが現状である。

超高齢社会

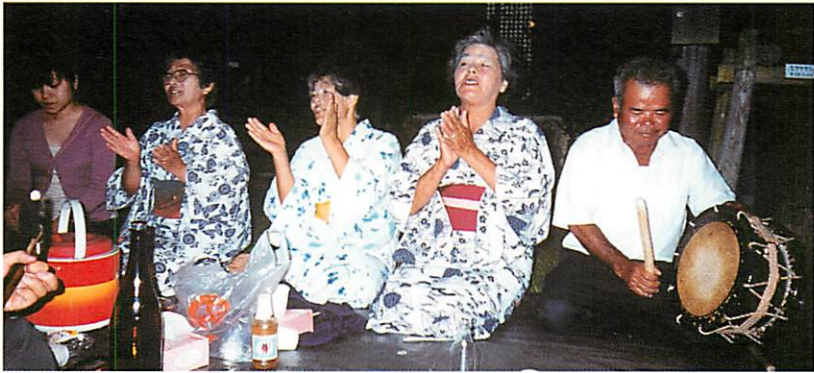
1990 年の国勢調査では、喜界島の人口は 9,641 人と初めて 10,000 人を割り込んだ。1999 年 12 月 1 日現在、9,360 人である。喜界島では昭和 30 年代 (1955 ~

1965) から確実に減少し始め、1995年では昭和30年代の人口の57.8%にしか満たない。

1995年の国勢調査人口を15歳未満、15～64歳、65歳以上の3段階に分けた年齢階級別人口から見ると、経済の高度成長期に若年層が流出し、過疎化が進行した奄美群島の年齢構造は65歳以上の老年人口の割合が高く、その進行が急激になっている。喜界

島においては65歳以上の人口が29%と、他の奄美群島市町村の中でも最も高く、また、農業人口から見ると、1995年では59歳までの就業者の割合が45%にもかかわらず、60歳以上の就業者が55%と大きく上回っている。1990年から比較してみると、全体では伸び率が87%と減少しているが、60歳以上では108%と増加している。

1997年現在の統計によれば、



宴の夜(上)
歌遊び風景(下)
©桑原季雄

喜界島には1,540人の農業就業者がいるなかで、60歳以上の人が実に55%も占めている。逆に50歳以下は全体の23%しかいない。あと10年もすれば、単純に考えても、全体の70%を60歳以上の人が占めることになる。

日本では、1970年に国連の定める高齢化率（65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合）が7%に達し、「高齢化社会」を迎えたが、他に例を見ない勢いで1995年には14%を超え、「高齢社

会」へと突入した。厚生省人口問題研究所の推計によると、2010年には高齢化率は20%を超え、欧米諸国の高齢先進国に先駆けて日本は世界初の「超高齢社会」になり、4人に一人が65歳以上の高齢者となることが予想されている。喜界島においても高齢化率は増加し続けており、1999年の市町村調査によると、高齢化率は国や県を大きく上回る31.2%と、1995年の29%からさらに上昇した。

農業立島の将来

このように数字だけを見ても農業人口の減少と就業者の高齢化がみてとれる。課題として、生産性の向上を図り、また担い手農家育成のための農業環境整備があげられる。

また、地域農業の発展を図るためには、地域ぐるみで農地、農業機械・施設、労働力を効率的に活用していく取り組みを推進するとともに、担い手農家の農業経営の確立を市町村や農協などが支援す

る体制を一体的に整備していく必要も指摘されている。2000～2001年産のサトウキビの農家手取額は1tあたり20,450円に決定した。輸入粗糖の8～9倍の額で国に買い取ってもらっている状況だ。しかも、コメのように生産調整もなく、出荷の手間や販路の確保、市況を気にすることもない。今後は、第3セクターで運営されている農業開発組合をはじめ、各集落に形成されつつある営農集団による農作業の受託が増えるであろう。そうなれば植付と管理は自分で、水まきは地下ダムのスプリンクラーで、刈取はハーベスターで、というように

年老いた農家でも十分サトウキビの栽培が続けられる。そのためには農地の流動化や農道の拡幅等が必要になってくる。

また、今後は、市場の需要動向に応じた収益性の高い園芸作物や畜産などを組み合わせた複合型農業の推進が行政における地域振興としての喜界島農業のビジョンである。現在では花き、野菜、果樹、肉用牛などその他の作目の生産も様々な要素の上に発展している。特に、キク栽培は近年大きく成長しており、地域興しとしても力を入れている地区もある。ごまの栽培も盛んで、その生産は日本一を誇る。このような果樹園芸・畜産は、サトウキビとの複合経営によって更なる成長が見込まれる。喜界島にはゴマや花良治ミカン、タンカン、寒小菊など 21 世紀を迎える今こそもっと見直すべきだと思われる作物も数多くある。

このように明るい材料を並べてみても益々高齢化が進むなかに

あつては、肝心の新規就農者（後継者）が参入してこなければ意味がない。現在は地下ダムの工事があり島の若者も大勢それに従事しているが、それも平成 15 年までにはすべて終了してしまう。その後は公共事業といっても、農地の 90% 以上も基盤整備が済んでいる喜界島において残るめぼしい事業は集落排水事業くらいである。若者がスムーズに農業に移行できるようにするためには農地、農業機械や軌道に乗るまでの生活資金の問題等をクリアしなければならない。そこで先にも述べた営農集団ともからめて農地の集積や流動化を進めていく必要がある。農業機械に関しても営農集団で共同購入・管理をしたり、農業改良資金や奄美群島振興開発基金を積極的に利用するなどして、ゆくゆくは補助事業に頼らない足腰の強い農業を展開出来たら喜界島の将来は明るいだろう。





第8章

長生きして闘牛に熱中

徳之島

中野和敬

(鹿児島大学多島圏研究センター)



泉重千代翁記念像

徳之島の名が全国的に知れ渡ったのは、何と言っても泉重千代さんの存在が大きかった。東京生まれで東京育ちの筆者にとって、鹿児島市へほぼ20年前に住み始めるころまでは、正直言って奄美大島と徳之島の区別はほとんどつかなかった。1979年にギネスブックに重千代翁が世界一の長寿者として載ってから徳之島という島の名と地図上のその位置が段々と頭の中で鮮明となっていった人は、筆者のみではなかったであろう。折しもそのころより、日本の国際化の進展と共にギネスビールがどこでも買えるようになったこともあり、ギネスブックというもののあることが知れ渡り、それに名の載ることの意味の大きさが日本人の誰にもぴんと来るようになった時代というめぐり合わせということもあったであろう。

このようにして翁は日本中の人気者となり、1981年、当時の鈴木

首相が沖縄からの帰途徳之島に立ち寄り、同島の空港で翁と会って親しく言葉を交わしたりした。同翁の年齢については、世間に伝えられていたのより本当はいくらか若いのではないかとの疑念を完全に晴らす証拠はなかったものの、ともかくギネスブックを通じて全世界に徳之島が長寿の島であるとのイメージを広めた意味は大きかった。なお、翁は1986年に114才でその天寿を全うした。

奄美群島共通のことではあるけれども、現在この島の年齢構成で65歳以上の全島人口に占める割合は24.6%と高く、すでに百歳に達した方がたは全島で10名以上もあり、男女別では、圧倒的に女性の方が多。なお、1999年4月に鹿児島市に住んでいる本郷かまとさんが長寿日本一となったけれども、彼女の出身地も徳之島である。

文化

泉重千代さんに次いで徳之島とのつながりで思い出されるのは、何百年もの伝統があると言われる闘牛への熱中ぶりであろう。全国で闘牛を楽しんでいる地方は近

隣の島じまを含めていくつもあるから、ここが闘牛の日本一盛んな所であるとは決められないが、その熱中ぶりは相当なものである。大きいとは言えないこの島に、大小10箇所近くもの闘牛場がある。闘牛が催されるのは正月休み、5月の連休、それに10月のころであるが、真夏に開催されることもある。決して安くはない入場料を払っても、千人をはるかに越える観客が集まることも少なくない。

闘牛のやり方は、二頭の雄牛が

頭どうしを合わせて押し合いをするのが基本である。勿論角も武器となる。そうしているうちに、どちらか一方が戦意を喪失して逃げ出せば勝負あり。柵に押し込むのも有力な戦法である。牛の闘志を引き出しながら牛どうしを取り組ませるのは、勢子と呼ばれる人の役目である。勝負がついた時には、勝った方の関係者は「ワイド、ワイド」と歓声をあげる。なお、ワイド節という民謡が広く島民に親しまれていることも付け加えておこう。



闘牛場風景 ②スタジオ・カガワ（徳之島町）

最近はこの島の闘牛も国際化し、1999年から和牛3頭を韓国へ2年続けて送り、かの地の赤牛と試合をさせたのである。日韓戦と銘打ったおかげで、プサン近くにある知名度の低かったその地の闘牛場で、計数十万もの観客を集めるほどの大イベントが開催できたとのことである。試合の結果は、徳之島では中堅クラスの牛が、向こうの横綱クラスと五分に渡り合ったようである。ただ、この日韓交流の泣き所としては、動物検疫の関係で、連れていった牛は日本へは返せないということが挙げられる。けれども、これを機に韓国から親善使節がこの島へ来るなど、日韓相互交流の進むきざしがはっきりしてきた。これが観光客増につながればよいと期待されている。

島外からの観光客が南西諸島に期待するおめあてのうち、忘れてならないのはサンゴ礁域のダイビングスポットであろう。徳之島にも、空港近くと東北端の金見崎付近および東岸にいくつかのダイビングスポットがあり、ダイバーの世話をする業者も計7軒ある。この島の回りでのダイビングの魅力は、珊瑚礁内でもその外でも楽しめることと、北からの要素と南からの要

素が渾然と溶け合って目にする海中の生物相がすばらしく多様性に富んでいることらしい。一番好適な時期は、台風の影響さえなければ海がおだやかな7月を中心としたところである。訪れるダイバーの数が増えれば、今は案内しないスポットも新たに脚光を浴びる可能性は大いにあるものの、ダイバー数は島外からの全観光客数同様伸び悩み気味のようなのである。しかし、今程度のにぎわいがダイビングの楽しさを存分に味わうにはちょうど良く、ダイバーの数があまり急激には増えない方がかえって良いと言う業者さえいる。つまり、この島の周囲の海は開発と自然保全のバランスが現在よくとれているということであろう。

ところが最近また徳之島の知名度を著しくあげるきっかけがあった。それは、シドニーオリンピックでQちゃんこと高橋尚子選手がマラソンで金メダルを取ったことにはほかならない。同選手はオリンピックの前にもこの島で練習を二度積んでいたが、金メダル獲得後一段とここの結びつきが、世の中の話題として高まったと言ってよい。彼女がいつも練習している北部を一週する道路31kmを“尚子ロード”



尚子ロード記念碑（「金メダリスト 高橋尚子」の部分
はシドニーオリンピック優勝後に追加されたもの）

と平成12年4月から呼ぶことにし、
 そのある天城町はオリンピック
 の前にその命名の碑を建立した。
 また、天城町は毎年6月下旬～7
 月上旬の日曜日にトライアスロン
 を開催しており、第14回目となる
 2001年の今年も順調に準備を進
 めているところである。参加者の
 定員は600名で、いつもほぼ定員
 を満たしている。それに向けて随
 伴者を含めて千人以上が島外から
 やって来るとのことである。この
 行事には天城町のみではなく、全
 島からのボランティアが至る所で
 大会の世話をする体制ができて
 おり、島おこしのイベントとしてふさ



2000年トライアスロンin徳之島
 優勝者ゴールの瞬間
 ©天城町役場

わしいものと考えられる。この競技
 の性格上、安全面を考慮すると、
 定員をむやみに増やすわけには
 いかないけれども、Qちゃんも走
 った道の一部は走るということで、参
 加希望者を断わるのに苦労するよ
 うになるかもしれない。

自然

徳之島には、遠くからは概してなだらかに見える山がいくつかあり、その最高峰は、島の中央部に近い所にあるその頂上が海拔高度 645m の奄美群島中第二の井之川岳である。そのほか、北部には頂上の高度が 533m の天城岳が目立つ。井之川岳の上部は奄美群島国定公園の指定を受けており、この地方の自然植生として特徴づけられるシイとかカシ類を代表とする常緑照葉樹林が比較的しっかりと覆っている。近年はこのような山地の天然林の利用がほとんどなくなったこともあり、雨量が毎月十分にある気候下であるところから、土壌層が厚ければ、森林がよく保たれ得る。奄美大島と同

じように、毒蛇ハブがこの島には数多く生息しており、人びとがむやみに森林中に入り込まない理由となっている。このことは、鬱蒼とした森林の雰囲気を楽しもうというエコツーリズムにはやや不利な点かもしれない。

海面からの高度 200m までの山麓の緩斜面には段丘がよく発達しており、畑地が広がっている。南部から西海岸にかけての緩斜面は石灰岩が風化して生成した、表層が黄褐色でその下は赤っぽい土壌が広く覆っているが、一部地帯は造礁サンゴの遺骸を多量に含む。島の北部と中央部を区切る峠付近は花崗岩を土壌層の下の岩盤としている。井之川岳の山体は古生代に生成した岩石でできて

産業

徳之島の総耕地面積は、公式統計によると、6,940ha で、これは全島面積の 28.1% にあたり、農家

一戸あたりの平均耕地面積は 1.86ha となっている。作物別作付け面積を見ると、サトウキビ畑の総面積が断然多く、4,531ha で、総作付け面積 5,779ha の 78.4% にもなる。なお、この島の水田面積の合計は 4ha である。薩摩藩がこの島

でのサトウキビ生産を本格的に推進するために、そのことに関する専任の役人を配置するようになったのは、江戸時代中期の1735年であった。江戸時代後期の1830年には島民には評判の至極悪い強制的なサトウキビの植え付け制度が始まった。この強制植え付け制度が、政策担当者間に直接の関係はないとは言え、やはり現地民には悪名高いジャワ島でのオランダによるサトウキビ強制栽培制度と

ほぼ同時代であることは興味深い。

徳之島で生産される精製前の原料糖(分みつ糖)と黒砂糖(含みつ糖)の合計量は最近では年間3万トンと見てよく、これは、鹿児島県産総生産量の39%にあたり、県内の島じまの中では、一番のシェアを誇っている。ここで、日本全体の砂糖の年間生産量と消費量とを比べて言うなら、原料糖生産量は80万トン、その内サトウキビからの生産量は24%であり、総消費量は



小型ハーベスターによるサトウキビの収穫風景

250万トン（そのほとんどは精製糖）と概略見てよい。こうした日本全体の需給関係はさておき、現地の状況を見ると、今の徳之島の農業にとって、サトウキビ生産の占める重要性は理解できよう。この島に限ったことでは勿論ないが、日本の南西諸島でのサトウキビ生産は全世界的な観点から見て、台風被害の危険性には目をつぶったとしても、日照時間を考えに入れると、最適な気候条件のもとで生産を続けているとは言い難い。と言うのは、サトウキビ収穫の数ヶ月前の登熟期に晴天の続くことがサトウキビ内の糖度をあげるには重要で、この点、この島の天候は通常その条件を満たしてはいない。1999年のように、10月と11月に降水量の異常に少なかった時、つまり、その時期に晴天日の多かった場合は、収穫したサトウキビ糖度の実際いつもよりはっきりと上昇したことがそのことの何よりの証しである。

今年のサトウキビの農家手取り価格は、1トンあたり薩南諸島全体の平均で2万700円台であるけれども、この価格は東南アジアの主要生産国での農家売り渡し価格の10倍をはるかに越えている。そのような国際価格とはかけ離れた

価格で売り渡しても、農家1戸あたり平均粗収入はざっと見て160万円程度にしかならない。コメとは本質的に違い、精製した最終製品の味に産地間の差がまったくない以上、現状では、完全自由競争原理のもとでは太刀打ちできないのは誰にも明らかであり、政府による補助金無しでは、サトウキビ生産の続けられないことがはっきりしている。そこで、サトウキビに頼らなくてもなんとか農家経営がうまく続けられるよう、様々な模索が進行中である。

先にも述べたように、昔から闘牛の盛んなことから想像されるように、この島の人たちは牛への思い入れが強いようで、肉用の子牛粗生産額がサトウキビに次いでいる。子牛は生後1年以内に島外へ出荷する。その年間出荷頭数は奄美群島中、断然トップにある。従来サトウキビと子牛生産は複合的に強く結びついていた。それは、サトウキビの葉が飼料として利用できるからである。けれども近年、農業従事者の高齢化が著しく進んだせいで、サトウキビ収穫時に作業が楽なハーベスターという機械に頼る度合いが高まる傾向がはっきりしてくると、事情が徐々に変わってき

た。その機械でサトウキビの桿を収穫すると、葉が飼料としては、使えなくなるところから、しばしば飼料作物専用畑を増やす必要が生じてきた。サトウキビ作付け面積はその結果幾分減少することになる。確かに子牛生産は島内農業の地位から言って重要ではあるものの、牛肉貿易が完全自由化に近い現状からいって、その生産額が今後さらにどんどん伸びる見込みはそれほど大きなものではない。また、高齢者にとっては、せりに出す子牛を運ぶという作業が楽ではないようであるから、今後も子牛の生産量を保つためには、若い人が頭数を積極的に増やす気になる魅力的な状況が必要となろう。なお、ハーベスターは、各農家賃借で使用しており、その賃借料が農家の実質収入を圧迫しているのではないかとの声もよく耳にした。

作付け面積、出荷額共に最近目立っている農産物はジャガイモで、本土ではまだ収穫できない1月下旬から出荷している。植え付ける品種は、先に述べたような表土のすぐ下が赤っぽい土の地帯によく合ったものを選んでのことである。また特に、取れた芋は中が白っぽいという点で、市場で

の評価が高いらしい。その粗生産額を最新の統計で調べると、子牛に肉薄するところまで行っている。ただ、その面積あたりの収量は日本本土の主産地に比べていくらか低いようであるし、今後もさらにどんどん全体の生産量が増えるかどうかはあまりはっきりしない。ジャガイモ生産もサトウキビ栽培との結びつきが強いようで、サトウキビを刈り取って株出し再生が経済的に見合わなくなった畑に植えると、土壌用農薬をまく必要のない点が有利との実情も聞いた。さらに、ジャガイモは、台風シーズンが終わってから植え付けた後、100日で収穫できる点でも有利である。

以前は奄美大島から原料をすべて運んでの大島紬の賃仕事はかなりあり、おもに女性が決して馬鹿にはできない額を稼いでいたけれども、今はそれもほとんどなくなり、魚取りも量的にはわずかで、観光客の伸びもそれほど顕著ではないから、島内各町の行政担当者は、原点に帰り、何とか土からの恵みを増やそうとあれこれ知恵を絞っているようである。すでに紹介したジャガイモについて言えば、その生産量の近年増える傾向にある事例は、南西諸島全体を見渡

すと、徳之島に限ったことではないものの、この島では現在のところ一番うまく行っている作物である。それに続くものとしてはやはり、霜の降ることがないという気候条件を生かした作物生産を盛んにしようとしている。ジャガイモは直接の競合主産地と収穫時期がずれるという利点を生かしたものであるが、亜熱帯性くだもの場合は、日本ではこのあたりでしかできないという特質を利用するもので、誰でもまっ先に思いつくものであろう。タンカン

は現在屋久島産が最も有名で、大都市でも大分その名が知られるようになったけれども、日本産の柑橘類の中では、味がバレンシアオレンジに一番近く、濃厚でしかも、力はあるものの、指で皮のむける点がバレンシアオレンジよりもまざっている。輸入もののバレンシアオレンジと本格的に競争するにはもっと価格をさげる必要はある。タンカンの栽培地としては、九州本土は冬が寒すぎるために、味の点で、南西諸島が国内では、最適地である。徳

之島でもタンカン栽培農家は増える傾向にはあるけれども、奄美大島にはまだ、はるかに及ばない。徳之島では冬の低温が顕著ではないところから、味に問題はないものの、実の色がだいたい色へと完全には変化しないことがある。タンカンに限ったことではないが、くだもの生産は多くの種類で、植え付けから最初の収穫まで複数年かか



マンゴー生産者の看板

り、その胚胎期間が農家にとっては大きな負担である。タンカンでは、それが3年間ということである。

タンカンは露地栽培が普通であるけれども、熱帯を原産地とする果樹の中には、この島で栽培するには、ハウスでなければできないもの、または、その方が良い果実のできるものも少なくない。その

代表がマンゴーである。日本でのマンゴーの生産農家は沖縄県から九州本土にかけて現在徐々に増えつつあり、徳之島に限った話ではない。本来は北回帰線より南の方でよく育つ熱帯果樹のマンゴーを日本でならせる利点はきれいな完熟果実が日本市場へ出荷できることにつきる。マンゴーを輸入した場合、バナナなどほかの熱帯性くだもの同様完熟状態で日本へ入れるのは現在いろいろな理由からむずかしい。そこで、値段ははっきりと輸入ものより高くても、味が良く、見た目に美しい完熟マンゴーを作ろうということになる。くだものに期待する性質のうち、日本人は見栄えという点に諸外国に比べるとはるかに重きを置く。おいしそうに見えなければ良い値段では売れないという現実が、日本への出荷を目指す外国のくだもの生産者にも広く行き渡っている。気候的な理由も勿論あるが、この点からも、日本におけるマンゴー生産は、ハウス栽培の方がよい。徳之島の場合、九州での栽培と大いに違う点は、必ずしもハウスをわざわざ暖める必要のないことである。輸送費が本土での生産よりかかるのは確かではあるけれども、そ

の点は九州より有利である。現在この島でマンゴーを出荷している農家の数は、まだ、合計しても100軒にならないし、販売額も1億円未満のようであるが、今後さらに生産量の伸びる可能性はある。その見込みを左右するのはやはり値段と、高いものでも食べてみようという気を起こさせるものができるかどうかが鍵であろう。ただ、日本には、贈答品は値段が高くて減多に食べられない物を選ぶというならわしがあり、そこを狙う程度の出荷なら、今後生産が盛んになる可能性はかなりある。ただ、徳之島では、出荷時期が秋であり、それが中元と歳暮の中間時期である点は、有利とは言えない。今のところは、取れたマンゴーのほとんどが農業協同組合を通さない郵パックではけているとのことである。

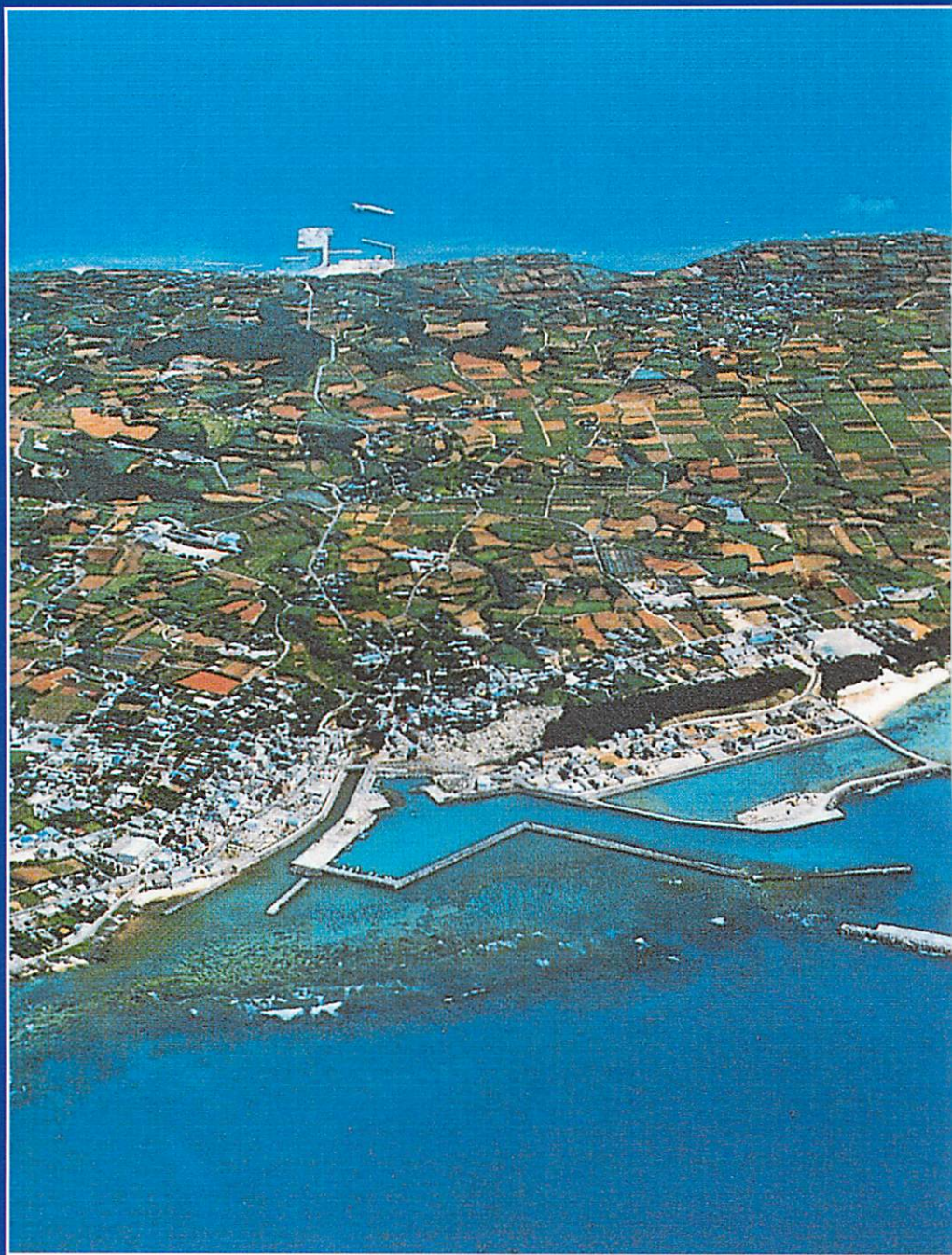
この島からとれる海産物で書いておきたいものに、ヒトエグサ（俗称アオサ）がある。1月から4月にかけて大潮の干潮時に島の海岸沿いの道路を巡ると岩が濃い緑色の海藻に覆われているのに気がつく。これが、ヒトエグサで、島の人たちはこうした天然ものを昔からとって汁に入れ、食べてきた。この食用ヒトエグサの分布域は日

本では、沖縄県の島じまから九州、四国、本州では西部から東海地方にかけてと大変広いが、徳之島では、当初県の助成を受け、この20年来その養殖に乗り出した業者が何軒もある。その生産量の半分以上は乾燥後板状にしてから、おもに南西諸島のほかの島じまへ出荷している。大半は旧来どおり汁にいれて食べる。そのすばらしい香りは大変印象的である。

九州で養殖されたものは乾燥後、“あおのり”としてふりかけ用、または、“のりの佃煮”として袋詰めとか瓶詰めで全国的に出回っているが、この島でとれたものについて言えば、全国向けに出荷できるほどの生産量はない。また、養殖による生産量を飛躍的に伸ばすには多大な投資が必要で、それは現実的でないと、この島一番の業者は言っている。



天然（近景）と養殖（遠景）のヒトエグサ（俗称アオサ）





第9章

エラブユリに賭けた人びと

沖永良部島

田代啓一朗

(鹿児島県沖永良部農業改良普及所)

坂田祐介

(鹿児島大学農学部)



北西に面した島の海岸は、波に浸食されたサンゴ礁の奇岩が果てしなく続き、その岩間にある潮水を 10 m も空高く吹き上げる洞穴（フーチャ）がいたるところに見られる。テッポウユリは、このようなサンゴ礁の崖や崖近くに広がる草地に自生する。◎和泊町

鹿児島島の南方 542km の洋上に浮かぶこの島は、周囲約 50km、面積約 95km²と、比較的小さく、その大部分が隆起サンゴ礁からなる。島には標高 250m ほどの山があり、山の周りには、カルスト地形に独特なドリーネが多数点在している。ドリーネを入り口にして鍾乳洞が地下に網目を拡げ、天の恵みの雨水を集める。そして洞内を流れる地下水は海辺で湧き水となり、島民の飲水や農業用水に使われるかたわら、程良く発達したサンゴ礁の海に流れ落ちる。この何の変哲もない島が、わが国でも有数の「自立した島」として変革を遂げた。そこには、痩せた土地に耐え、北西の風を好む「えらぶゆり」を手に、ほぼ 1 世紀にわたって島民たちが演じた「島興し」のドラマがある。

西郷隆盛が はぐくんだ島民性

1266年(文永3年)から約340年間、琉球王の統治下にあった沖永良部島は、1609年(慶長14年)、島津藩による琉球征服で薩摩に服属した。島はその後260年ちかく、1871年(明治4年)の廃藩置県まで、島津藩の奴隷的植民地政策に喘ぐことになる。藩の行った島政改革は、世にいう「砂糖地獄」に島民を陥れた陰湿過酷な仕打ちとして、今でも島に語り継がれる。

このような中、島にとって一つの重要な事件が起きた。それは、1862年(文久2年)、薩摩藩主島津久光の怒りにふれて西郷隆盛が島に流され、投獄されたことである。西郷は、流刑の地の沖永良部島にわずか2年間しか留まらなかった。しかしこの間、とくに島の若者たちに学問や政治を教え、道徳や倫理観を植えつけるなどして、島民たちの「自立」を、間接的ではあるが、支援した。

土持政照(1834年生まれ)は、西郷隆盛入牢時の間切横目(現まじりよこめ)現在の警察署長)で、後の1864年

(元治元年)、島の余人(現在の町長)を務めた。彼は、牢獄から座敷牢へ西郷を移し、身の回りの世話をした。西郷と深く関わっている。土持は、「選で、選ばらぬ、沖永良部島(すばらしい沖永良部島)」を創るには、何よりも学問が大切と悟り、これから育てていく子供の教育に、幼時、彼が鹿児島島の地で学んだ「郷中教育」が最適と考え、郷中教育の師と仰がれ、敬愛する西郷に教育を嘆願した。西郷は願いを快く引き受け、20名あまりの少年たちに教育を行い、彼らに島の将来を託して、島を離れた。

西郷隆盛はまた、頻繁に台風に襲われ、干ばつに見舞われる島の状況を見て、中国では宋時代に実践された社倉法しゃそうほうの例を持ち出し、土持政照に、飢饉や飢餓から逃れる方策を示した。それは、平年作の年には米や麦、粟などの穀物を島民から供出してもらい、社倉に蓄えておいたものを、飢餓の年には少し利子を付けて貸し付けるやり方である。社倉法は1870年(明治3年)、土持の手で実施され、奄美群島の島々に蒸気船が寄港し大量の物資輸送が可能になる1899年(明治24年)まで続いた。この間、島民が培った勤勉性、儉約性、貯

蓄性の気風は、島民の性格を良く伝えるものとして、現在もなお沖永良部島に生き続けている。

西郷隆盛の教育を受けた少年たちの中に、操 坦勁（1847年生まれ）がいた。1887年（明治20年）、知名村ほか17か村の戸長（現在の村長）になり、1908年（明治41年）には、島嶼町村制（沖永良部島は知名村と和泊村の2村となる）が実施されたのに伴い、知名村の村長に任ぜられた。彼は、西郷の言う「一家和合の道は、ただ欲を去ること」を座右の銘として、

港湾や灌漑、道路整備など、私財を投じて多くの事業を行った。また、小学校の設備を充実し、縁故ゆかりの無い書生にも餞別を与え、遠くから高等小学校へ通学する子弟を下宿させてたりしている。特筆すべきは、老人を自宅に招き長寿を祝っており、これが島の敬老会の始まりといわれる。

土持政照にしても、あるいは操坦勁にしても、地方行政の長として示した「島興し」の想いは、島民に深く浸透し、このことが、沖永良部島を自立へと導いた。

島の自然と島人が つくりあげた 「えらぶゆり」

テッポウユリ（学名 *Lilium longiflorum*）は、屋久島から以南、八重山諸島にかけて広く自生する。このユリは、古生層の島から隆起サンゴ礁の島まで、あらゆる自然環境にも強い適応性がある。古生層の島では、海水が洗う岸壁や傾斜地に、また、隆起サンゴ礁の

島では、海辺の草地や他の植物が育たない崖に根を伸ばし、花を咲かせる。

このユリが、1870～1980年代に万国博覧会などを通じて欧州に紹介されると、純白の花の清楚さは称賛を浴び、「イースターリリー」と呼ばれ、純潔の象徴としてキリスト教の行事に大量に使われた。こうして早くも欧米へユリ球根の輸出が始まったが、1899年（明治32年）、海難に遭ったイギリスのユリ商人アイザック・バンティングが沖永良部島に上陸し、サトウキビに代わる換金作物としてユリ

球根栽培を奨めたことも、球根輸出を後押しした。その後、第一次世界大戦、ウイルスによる球根汚染、過剰生産、百合同業組合の内紛、あるいは第二次世界大戦など、紆余曲折はあったが、ユリ球根の生産と輸出は現在まで連綿として続き、絶えたことはない。

テッポウユリの自然の開花期は、沖縄南部で3月下旬、沖永良部島で4月上旬～下旬、また、東京付近で6月中旬である。わが国で

は、この時期には切花が多く出回り、1本当たりの単価は安い。そこで、単価の高い11月から翌年3月にかけて切花を出荷したいのだが、春から夏にかけて咲く花を冬に咲かせるには、それなりの栽培技術が必要だ。この技術を促成栽培という。ユリの促成栽培では、できるだけ早い時期に「充実した球根」を手に入れ、低温を与えるなどの処理をして植えつける。欧米でも4月のイースターに花を



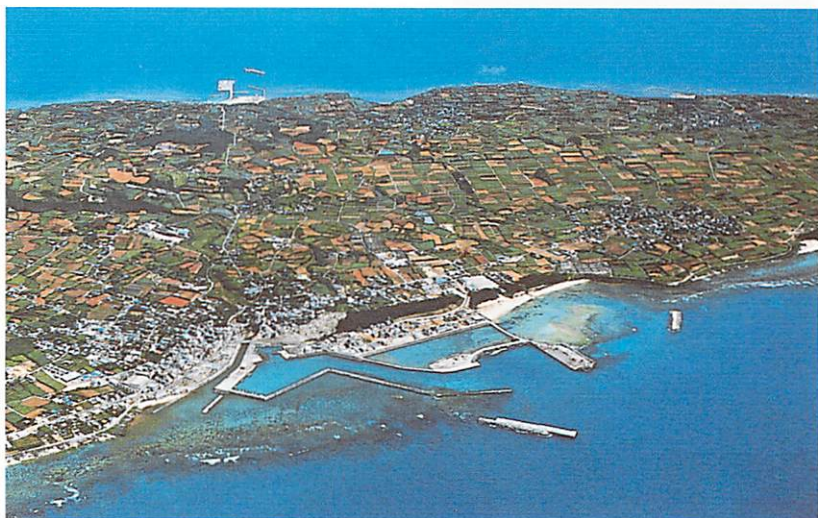
昭和39年7月、和泊港岸壁に客室船「あけぼの丸」(610トン)が初めて接岸した。これまでの舢(はしけ)による積み荷の煩わしさは、これで解消された。その後昭和45年には1,500トン級、また昭和49年には6,000トン級の船舶が接岸するようになり、球根の積み出し(写真左上)は、大幅に改善された。©和泊町

間にあわせるには、同じように早い時期に球根を手に入れている。

沖永良部島の年平均気温は22℃前後である。とくに12月から翌年3月の冬期の平均気温は17℃と、温暖だ。テッポウユリの生育適温は15～25℃なので、島の気候はユリ生産に良く合っている。このことは、島以外の生産地より球根を1か月以上も「早く収穫できる」という有利さを島にもたらした。また、隆起サンゴ礁が風化した土壌は重く粘土質で、「しまりの良い」充実した球根が出来る。こうして、沖永良部島産球根は促成切花栽培

に最適という評価を受け、他の追随を許さない。

充実した球根を早く収穫し、出荷するために、島内外の多くの知恵と努力が結集された。輸出に適した品種の導入育種、欧米が要求するウイルスフリーの球根生産、あるいは出荷調整や輸送の合理化など、町や県の行政組織の後押しを得て生産出荷体制を確立している。例えば、品種「ひのもと」や「ジョージア」を導入したことや、無病球根生産に「親子りん片繁殖法」を考案し実施したことなど、評価は高い。



整備された和泊港と、市街地を取り囲むように広がる球根や切花の生産圃場。和泊町の耕地の割合は62%ときわめて高く、その71%が基盤整備されている。 ©和泊町



球根生産のためのユリ栽培は、サトウキビの枯葉をすき込んだ痩せた赤土で行われる。「しまりの良い」球根が出来るのはこのためである。©田代啓一朗

島では、6月上旬から7月上旬の1か月間が球根の収穫期である。これより早いと発芽しない球根になる。古い茎と葉を切り離し、1個ずつコンテナに入れる。収穫した球根をコンテナごと殺菌剤に浸け、集荷場に運び込む。

©和泊町



球根生産から 切花と野菜生産へ

和泊町が切花生産を始めたのは、1973年(昭和48年)頃からである。当時、わが国は石油価格の高騰で、諸産業界は急激なコスト高に見舞われていた。このことが、亜熱帯の温暖な気候を活かして切花を島で作ってみようとする引きがねになった。また当時は、

「連作」のためユリ球根は腐敗病やウイルス病などでひどく品質を低下させていた。あるいは、欧米でもテッポウユリ球根が生産されるようになったことや、欧米への球根輸出は、イースター用に限られていたことから、輸出量は落ち込み、以前のような収入が得られなくなっていた。

このような状況の中、1977年(昭和52年)9月、猛烈な台風が島を襲った。瞬間最大風速80m/s以上、気圧も観測史上最悪の907mbを

記録したこの台風は、島の民家約5千戸の8割を破壊し、その復旧に、農家だけでも約98億円の借金を負担させた。この台風襲来は、球根主体の生産から切花へと、生産品目の転作を促す直接のきっかけになった。当時、「球根より切花の方が収益性ははるかに高かったので、切花生産で復旧費を稼ぐことにした」と、生産農家はいう。さらに、切花への転作に追い打ちをかけたのは国際化の急進展である。1985年(昭和60年)のプラザ合意をきっかけに、急速に、円高と農産物の市場開放が進み、ユリ球根輸出は打撃を受けた。こうして、テッポウユリ球根生産は、緩やかではあるが、確実に減少していった。

沖永良部島の花き栽培は、明治期に、島に自生していたテッポウユリ球根を栽培したことに始まった。他の作物を含めて第二次大戦後の島の農業の流れを見ると、まず、1960年代までの、ユリ球根とサトウキビ生産が挙げられる。1970年代には、ユリ球根とサトウキビ生産は本格的になり、水稻の生産は逆に激減し、水田はほぼ畑地化した。次いで、ユリ球根とサトウキビ生産から、切花と野菜生産

への転換がはかられた1980年代である。切花はグラジオラスが主体で、野菜は里芋と馬鈴薯が多く作られた。1990年代に入ると、切花生産は大幅に拡大し、新たに、キクやユリ、ソリタゴなどが加わった。

このような島の農業の流れの中で、耕地の利用形態で重要な変化が起こった。それは、球根とサトウキビは露地で作られるのに対し、切花は施設で栽培されたことである。1980年代初めの露地から施設栽培への転換は、この時期を境にして、「輪作」という栽培形態が崩れたことを意味している。つまり、施設を建て、定まった土地に毎年同じ切花を作る連作形態に変わったのである。このことが原因で、沖永良部島はその後、環境保全に関わる極めて厄介な問題を抱えることになる。

環境汚染という 試練をかかえて

沖永良部島の水について、硝酸態窒素と農薬の分析を三重大学が行っている。1994年(平成7年)の報告書によれば、林が残っている場所の水源の窒素濃度はほぼゼロで、問題ないが、畑に囲まれた水源の濃度は2～3ppmで、中には6ppmを越すものがあるという。また、井戸水と湧き水の場合、環境基準値の10ppmを越すものが8か所、5～10ppmが20か所もあり、このような高濃度の硝酸態窒素蓄積の原因を、圃場に使われる化学肥料と警告している。高濃度の水源からは、現在取水されていない。しかし、畑地が増え施設栽培化が進めば、近い将来には水質汚染は必ず拡がる可能性がある。

農薬については、地下水の調査で34地点中9地点で、また、側溝や海への排水の分析では13標本中9標本で、いずれも0.1ppb以上、最高で3.3ppbが検出された。水道水の安全基準は5ppb以下なので、まだまだ安全と思うか否かは島民が判断することである。

和泊町内の農薬使用量は、耕地面積当たりでは63kg/haと、全国レベルとほぼ同じだ。しかし、耕地割合は島の面積の47%と高いので、総面積当たりは31kg/haと、全国使用水準の2.6倍に達する。花の栽培ではサトウキビの10倍近い農薬を使うのが普通なので、この値はなにも驚くべきものではない。例えば、一般の農薬散布では、キャプタンなどの殺菌剤は1000～2000倍に薄めて使うのに対し、球根や馬鈴薯種芋を農薬に浸けて殺菌する場合、農薬はかなり高濃度の100～200倍に薄めたものを使う。ところが、赤土にまみれた球根や種芋を薬液に浸けると、数回で薬液は汚れる。そこで、薬液を栽培圃場や道路、側溝などに捨てることになる。切花栽培の場合も同じで、食物でないので頻繁に農薬散布される。しかし、圃場に大量に投入された化学肥料や農薬は地下水に溶け込み、側溝に捨てられた農薬は直接海に流れ出す。このような悪循環が島と海を汚し、島民と海の生物を蝕んでいく。

1994年(平成7年)、和泊町は化学肥料や農薬の投入量を、2000年までに約20%削減する方針を打ち出した。また、1996年(平

成8年)には「農薬廃液処理施設」、1997年(平成9年)には「えらぶ堆肥センター」、1999年(平成11年)には「廃ビニール処理施設」を建設して、環境汚染防止に努めている。これらの行政的措置は、かなりのを得ている。しかし、例えば化学

肥料を減らした分だけ、有機質肥料を増やしても、窒素の総投入量は減らないという事実を、行政はどのように受け止め、どのように対処するのだろうか。

切花生産と 流通にみる 沖永良部の現象

沖永良部島は、そもそもユリ球根の産地であった。明治末に野生ユリ栽培が始まり、ほぼ100年が過ぎている。第二次大戦後の1949年(昭和24年)、島にユリ球根を扱う「永良部ユリ根出荷組合」が設立され、その後、フリージア球根も生産されるようになったので、名称を「永良部百合フリージア生産出荷組合」と改めている。

これに対し切花は、1970年代半ばに和泊町で生産が始まり、1981年(昭和56年)、出荷を取扱う「えらぶ花き園芸組合」が設立された。一方、和泊農協(現在のJA和泊)でも、組合員が切花生産を始めた

ので、その出荷を取扱っていた。こうして、えらぶ花き園芸組合と和泊農協の、二つの切花出荷組織が和泊町に存在することになった。しかし、これら二つの出荷組織を一本化しようという気運が高まり、1990年(平成2年)、「沖永良部花き流通センター」が誕生した。

和泊町の農家から花き流通センターに集荷され、全国の市場に出荷される切花の販売額は、確実に伸びていくはずであった。確かに、町全体の販売額は、1990年(平成2年)度の約18.5億円から1996年(平成8年)度の約31.5億円へと、1.7倍に伸びている。花き流通センターでも同じ伸びを期待していた。ところが、平成3年度までは約3,400万円にすぎなかった「個人が直接市場に出荷」する切花販売額が、平成8年度には約6億円にまで増えており、さらに、平成8年度

には、JA 和泊が集荷と出荷の取扱いを再開していた。つまり、花き流通センターの切花販売の割合は、設立当初98%あったが、平成8年度には約76%に下がっていた。こうして現在、切花をめぐって、一つの町に三つの出荷システムが存在するようになった。これはとてもユニークな沖永良部島ならではの現象だ。

「沖永良部花き流通センター」は、切花生産の情報収集や情報提供の拠点となっていて、出荷予約システムで、全国130あまりの市場に計画的出荷が可能だ。切花生産農家は、花き流通センターが、生産から販売までを担う中心的組織として、また、島が全国に名だたる切花生産地として成長するうえで、大きな役割を果たしていることを十分すぎるほど承知している。しかし、花き流通センター離れが少しずつ広がっているのは、生産者個々人の栽培技術や努力の差が価格に反映され



島の町営実験農場に咲き誇るテッポウユリ。ここでは、ユリを始めとする花の優良種苗の供給や優良品種の普及を図るかたわら、栽培技術研修や経営指導など、「人づくり」も行っている。©和泊町

ない場合や、販売価格が個人出荷やJA 和泊取り扱いより低い場合のあること、あるいは、出荷コストがややかかることなど、自立している島民の生産意欲を、削いでいるのかもしれない。





第10章

与論島

与論健康村

古川 誠二

(パナウル診療所・与論健康村村長)

野田 伸一

(鹿児島大学多島圏研究センター)

与論島は薩南諸島の最南端に位置する島で、人口約6千人、面積20.5km²、全島で与論町を構成し、地元では「ユンヌ」と呼んでいる。全島が隆起サンゴ礁からなる平坦な島である。上空から眺める島はエンゼルフィッシュのような形で、島の周囲にはサンゴ礁が発達しており、その美しさは「東洋の海に浮かび輝く真珠」と絶賛されている。沖縄の本土復帰までは日本最南端の島であったことから人気を集め、真っ白な砂浜とエメラルド色の海を求め、年間8万人の観光客が訪れている。パナウル王国（パナ=花、ウル=サンゴ）宣言、ギリシャのミコノス島との姉妹盟約などリゾートアイランドとしての開発が行われている。

私が最初に与論島を訪れたのは20年程前で、与論島が観光で脚光を浴びていた時期である。与論島には日本人が持つ南の島のイメージ通りの風景が広がり、視覚的にも感覚的にも南の島にいたことが体感できる場所であった。当時は、あまり観光施設がなくても、美しい海があるだけで若者が押し寄せてきた。現在でも観光は島の重要な産業となっており、観光客のニーズに合った観光の振興

が図られている。夏季集中型から通年型観光への拡大、観光の島にふさわしい景観や町並み作り、観光客の誘致につながる情報の島外への発信など様々な努力が続けられている。

昨年、与論島で開業されている古川医師とお会いする機会があった。その時に、与論島に与論健康村という民間の施設が共同して活動しているグループがあり、与論島の気候や風土を利用した健康づくりを目的としていることを聞くことができた。今回、与論健康村の活動を通じての地域おこしの詳細を古川医師に紹介していただくことにした。いろんな地域おこしの活動があるが、その活動に医療活動が含まれ、さらに予防医学の第1次予防（人々の健康づくりや予防接種、環境衛生の改善などを通じ、疾病の予防を図ること）に配慮がなされている点は、与論健康村の活動のユニークなところである。

久しぶりに古川医師との打ち合わせのために与論島を訪れたが、その美しさに変わりはなく、着実な地域づくりと与論健康村のメンバーの活力を実感することができた。与論町振興計画の資料によると、与論町で純生産の割合が最も



空から見た与論島 ©金子喜八郎

高い業種はサービス業で、以下、建設業、農業、卸小売業、金融・保険業となっている。総人口の1/3の2千人が茶花地区に、そして東区、那間地区で中規模集落を形成し、その他の地区が小規模集落を形成して島内全域に広がっているが、近年、各集落の人口は減少傾向にあり、島全体の均衡ある発展が課題とされている。具体的方策

として、2001年度を初年度として、向こう10年間の与論町の進むべき方向、目標そして実現方法を示した第4次与論町総合振興計画がまとめられた。そのテーマは「人と自然が輝く“オンリーワンの島作り”」で、これから官民一体となって実行されることになっている。

(野田伸一)

地域おこしの活動

バブル経済の影響は、鹿児島県のはるか南の離島にも確実に影を落としていた。その名残を、商店街のシャッターの下ろされた店や、島のあちこちに点在する閉じられた民宿、果ては使い道のよくわからない百合が浜のモダンな建築物に見ることができる。まさにつわものどもが夢の後という感である。離島にして、茶花銀座通りと呼ばれる商店街の地価が坪70万円ほどだと聞いた時には、もう開いた口がふさがらなかった。バブル崩壊後、日本経済のゆがんだ部分を抱えたまま島の行政もごたぶんにもれず赤字の地方財政に転落していった。さばききれないほどの多くの観光客から得た収入はどこに消えてしまったのだろうと誰もが言う。少子高齢化社会の到来で、島の人口は徐々に減り、将来に誰もが不安を感じる時代が到来したのである。

そのような時代の変化の中から今までにない動きが少しずつ出てきた。それはややもすれば公共事業中心のお上に頼った地域活性

化を図る構図になりがちなこれまでのものとは違い、民間が自分たちでできることから手作りの地域作りをはじめようという動きが出てきたことである。人間の生き方を方向転換するという意味では、むしろ時代のもたらした恩恵ともいえるかも知れない。その代表は、私達の考えた与論のアイランドとしての特徴を生かした健康づくりの島を目指す与論健康村と、与論の伝統的な産物や歴史、言葉などを生かした地域作りを目指す与論民俗村、ならびに姉妹提携を結んだギリシャのミコノスとの関係をもっと実質的な文化、物産、人的交流を深めてギリシャのイメージを持ったまちづくりを目指すヨロン島ギリシャ村の設立などである。また地域婦人部や、4Hクラブ、異業種間交流クラブなどの動きもここにきて活発になっている。それぞれの個別の動きをまとめようと地域振興10か年計画では、第一線に立つメンバーが集ってまちづくり検討会として協議を重ねた。通常の町当局から依頼をうけた4回の会議以外に、番外編としてほぼ毎週午後8時から夜中まで徹底して討論を行った。この結果については、与論町議会の承認を得て正式な計

画書となっているので概略を最後に紹介したい。

検討会を進めていくうちに改めて確信したことは、言い尽くされた言葉ではあるが、地域興しはやはり人材である。責任者を仰せつかったこの時期、与論にいつの間

にかこれだけの人材が集っていたということに、私は驚きとともに大変恵まれた状況であることにつくづく感謝した次第である。地域おこしは、東京からでも地方からでもない、その地域に住む人からである。

与論健康村構想

私は、1988年に縁あって与論町立診療所に赴任した。地域を考えた全人的医療を実践するプライマリ・ケア医を自称する私にとって、医療圏の明確な離島は最適地であった。与論島は鹿児島県とは言え、県庁所在地から500kmも離れ、また琉球王朝の長年の影響を受けた特殊な地理的位置にあり、独特の文化や風習を持っている。また、その美しい風景は自然破壊が進んだとは言え、今でも多くの旅人を魅了してやまない。そんな与論での医療の中で、病気の本質は、その生活や、地域の持つ風土の中にあり、その独特の地域が、またある人にとっては癒しの空間となることを確信した。何せ人口

6,000人あまりの島で、90歳以上の高齢者が120人もいる。それもばりばりの現役の人が多し。島の持つ特性を生かした健康作りを、国土庁の地方振興局離島振興課はアイランドセラピーと称し、その特性を、

- 1) 非日常的な環境：海によって隔てられている島は、その孤立性、狭小性によって都会人の生活環境と異なる環境などを提供し、転地療養や健康保養に適している。
- 2) 島には美しい自然が多く残され、景観的にも優れた場所が多く、散歩やハイキング、サイクリング、海水浴をはじめとしたマリンスポーツ、レクリエーションの展開が期待できる。
- 3) 島には古くからの固有の文化が蓄積されており、都会人が忘れ

かけている人々の結びつきや交流が盛んに行われている。島での滞在は、健やかな心を養い、疲れた心を癒す。

- 4) 島で取れる海産物や農産物はヘルシーな食材である。
- 5) 美しい海に囲まれている島では、どこでもタラソセラピーの効果が得られる。

としている。まさに、与論島は島の大きさや形、気候、文化からしてこのアイランドセラピーに最適の島である。

与論健康村の構想は、私が与論町国保直営診療所に赴任した当初から頭に描いていたものであった。そして当時、与論プリシアリゾートからも健康保養地としての構想があり医療面での協力を要請されて相談に乗ったことがある。与論町でもそれに取り組むような

動きが一時あったが、なぜかいつのまにか中断してしまった。そのころの思いをずっと抱いていた私の与論健康村の活動は、アイランドセラピーの構想が発表される前から開始されたが、さらにこの構想にわが意を得て、既存の施設を活かし、医療観光という観点からより幅広く取り組むことにした。

WHOによると、健康とは肉体的、精神的、社会的に well being な状態であるとされているが、私はこれに先に提案のあった spiritual well being な状態であるということ定義を追加したい。スピリチュアルによい状態とは、私は自分の与えられた人生の目的に向けて一生懸命に生きていく状態であると考えている。与論健康村では、そのような健康びとを目指した活動を進めて行きたい。

与論健康村の活動

与論健康村は、1995年にその名を正式に旗揚げした。先に述べたように計画は10年来温めていたものであるが、私のパナウル診療所を那間という自然に包まれた新天地に移してから実質的な活動が始まった。土地を貸してくだ

さった方とはそれ以前から有機農法で健康な食材や熱帯果樹の生産をはかるという構想を練っていたが、ちょうどその頃から熱帯果樹の収穫も始まり、シャロン農園として仲間に加わって頂き、園芸療法も兼ねて食と健康の部門の中核となった。新築移転したパナウル診療所は、大断面修正材を利用した全木造建築とし、健康増進のための空間を施設の半分をとった独自の構造とした。

1次予防医学を柱にしたいと考えていた私は、高齢者のデイサービスとしてのふれあいデーの開設、そしてウォーキングをはじめストレッチ体操、リズム体操などの健康スポーツ教室を定期的に開催することにした。また、環境が健康に及ぼす影響の重大さを鑑み、年2回環境と健康をテーマにフォーラムを開催。環境にやさしいといわれているケナフの栽培などにも取り組んだ。

ちょうどこのころ、与論に赴任したときから特産品作りの相談を受けていた方が、もずくそばの開発に成功し健康食品として売り出した。以前からの課題だった塩作りにも取り組み、自然塩じねんの名で、伝統的なきび酢は黄金酢の名

で、ともに健康村の一端を担うようになった。また、島外からの長期療養者の受け入れのための宿泊施設として、すぐそばの与論島ビレッジ、民宿楽園荘、与論プリシアリゾートに協力してもらうこととした。ほかに陶芸教室として、与論焼き窯元、ゆんぬあーどうる焼き、手芸教室にギャラリー海、気軽に集まれる場所として、居酒屋ひょうきんなどが仲間となってくださった。総合的な健康づくりを目指す健康村の運営は、独立した企業の共同事業の形にし、年会費5,000円として運営の規約にあたる簡単な定款を作った。一般会員は年会費1,000円とした。(詳細は与論健康村ホームページを参照。<http://village.in-foweb.ne.jp/fwbc7262/>)

このような形態の組織はもちろん与論では初めてで、与論健康村として観光協会に入会したときは、何をする組織ですかとなかなか理解してもらえなかった。最近では、療養のための長期滞在者が冬場に増えて観光に役立つことがやっと理解されつつあるようである。

与論健康村がはじめた月1回の定例ウォーキングは、いまや与論町観光協会に事務局を置くヨロンウォーキング愛協会にまで発展し

た。与論島の1周ウォーキングコースを大きく5つのセクションに分けてそれぞれに名称をつけて年間を通して誰でもが歩けるようにパンフレットを作った。年1回11月に開催しているヨロバナウルウォークは、毎年全国からの参加者が約200名あり、今回は10回目の大会となる。

伝統的な唄三味線は与論の人々の生活にとっては切り離せないものである。最近まで島の男女はこの三味線の交流を通して結ばれていた。月夜の晩に男は好きな女の家を三味線を弾きながら訪ねていく。女も好きな男の三味線の音を待ち焦がれて一緒に出て行く、いわゆる浜遊びの習慣である。与論の伝統的な三味線を癒しの道具として取り入れ三味線教室を開催している。1か月滞在の間に大概1、2曲は引けるようになる。また、地域の子供達にも参加してもらって伝統の継承という意味でも役立てている。

さらに、定住者のための与論健康村住宅を建て、モデルとして紹介している。定住者が、新しい地域興しの風を吹かせることも期待できるし、交流が広がる。もちろん人口の増加はそのまま地域活性

化につながる。特異な事例だと思うが仏教の普及していない島に、布教させたいと願っていた日蓮宗の上人と縁あって出会い、与論島に在住して下さることになった。現在心のケアの部門で時々法話を聞かせていただいている。

地域交流のために北海道の新冠と小学生の交換留学をはじめた。まず手始めに、2000年の1月2日から7日まで、与論の子供達に冬の北海道を体験してもらおうと4名を引率していった。子供達は、太陽小学校の子供達の家ホームステイをして、酪農農家の様子を見たり、スキーをしたり貴重な体験をすることができた。また、7月の末からは新冠の子供達が8名与論の夏を体験するためにやってきた。来島時、あいにくの台風にあってしまったが、それでも合間を縫って海で元気に泳ぐことができた。そしてまた今年2001年1月に与論の子供達3名が北海道にいった。資金は、本人負担を少しとして、大方をバザーや寄付でまかなった。

与論健康村ホームページは数年前からオープンしていたが、最近与論を愛する島内外の人に参加してもらおうと与論健康村メーリングリストなるものを作った。現在約100

名ほどのメンバーが加入しているが、色々な情報交換が活発にできて新しい形のネットワークが進んでいる。おまけにインターネットは時間と距離の壁を完璧に取り去ったので、国内はもちろん、アメリカ、香港、インドなどと常に交流ができるようになった。島を訪れるメンバーとは、時々オフ会をして直接顔をあわせての交流も行っている。

さらに新しい事業として、キビ刈り援農隊を募集し、農家と都会の青年との交流もはじめた。今年度は、15名ほどの応募の中から選抜された5名の若者が参加した。なかなか積極的に仕事に取り組み上々の評判のようである。

最近の試みとして、自然エネルギーの利用のために、プリシアリゾートの敷地内に、風力発電と太陽光発電を併用した、いわゆるハイブリッドタイプの発電装置を設置中である。今後とも、環境にやさしいクリーンエネルギーの島、健康な食材の提供できる島、環境と健康を考える島として、総合的な健康作りの場としての与論島のイメージを作り上げていくことを与論健康村としては目指したい。



ヨロンバナウルウォーク ©古川誠二



与論健康村の事務局があるバナウル診療所
©野田伸一



バナウル診療所内での健康スポーツ教室
©古川誠二

今後の展望

与論の将来の計画としての一つとして、与論町振興10か年計画をまとめたのでこれをもとに今後の展望について紹介したい。与論健康村の目指す方向はこの中にもこまれている。

大きなテーマは、オンリーワンの島作りである。

オンリーワンの島作りとは、与論にだけしかない、与論でしかできない、他の地域に負けない、自慢できるなどの特徴のあるものを作り上げる島作りのことである。与論島独自のカラーを出すためには、地域の資源、文化をよく理解し伝統の上になつて、さらに新しいものを加えていくという作業をしなければならない。そこで、基本構想として

- 1) オンリーワンの人づくり
- 2) オンリーワンの産業作り
- 3) オンリーワンのまちづくり

を掲げた。地域を興すにはまず人がいる。これからそのような地域を担う人材を養成しなければならない。よく言われるよそ者、若者、ば

か者はもちろんのこと、総合的に発展していくためのバランスの良い人材が必要である。

また、具体的なプロジェクトとして次のようなテーマを取り上げた。

- 1) 島を支える頭脳集団づくりとして、ゆんぬまちづくり大学の設置、まちづくり委員会の結成。まちづくり大学では、1年間の準備期間を置いて正式な事務局とカリキュラムを作成し、1年単位で卒業とする。その卒業生を今後は実践の場での指導者として活動させる。まちづくり委員会は、まちづくり検討会のメンバーを基本として新たに適任者を加え、10か年計画の推進や監視にあたる。
- 2) 生きた博物館構築プランとして、ユンヌエコミュージアム構想の推進、与論・ギリシャ交流のまちづくり推進、与論ブランド創造プラン、与論特産品開発支援センターの設立、絹芭蕉布の特産化事業の推進をする。現在あるようなテーマパークや保存する施設を作るのではなく、実際に活動していて、体験できるような形で与論の文化や伝統を紹介する。ギリシャとの交流もさらに人的にも

物質的にも内容を深めて行く。与論島独自の物産がまだまだ少なく、与論の有志が一丸となって特産品開発に取り組む。またそのために24時間オープンのセンターも設置する。歴史的な織物の芭蕉布を絹との組み合わせでさらに新しい織物として開発していく。そのことにより伝統的な大島つむぎや、芭蕉布の技術を残すことができる。

- 3) 情報の島づくりプランとして、情報基盤の整備促進、情報教育の推進、ソフト産業の誘致促進をする。すでにこの事業は郵政省の補助も決定しており現在の所、与論中学を中心にインターネットを駆使した情報教育、光ファイバーとASDLを結んだブロードウェイ構想がスタートしている。
- 4) ゆんぬふれあい交流プランとして、ゆんぬ文化交流事業の展開、健康作り交流事業の展開、ギリシャ経済交流事業の展開をする。経済交流にはすでに日本貿易振興協会（ジェトロ）の多大なる支援を頂いている。
- 5) 環境の島作りとして、環境基本計画の策定、新エネルギーの導入、活用、与論の海再生プロ

ジェクト、環境学習の推進を行う。環境破壊問題は地球規模の問題でもありまた、与論の自然をいかに保護するかというローカルな問題でもある。与論の美しい海をいつまでも残してほしいという願いは町民のみならず、与論島を愛する全国のファンの願いでもある。与論の海の状態を調べるためにリーフチェックをはじめた。向こう10年間調査データを集める予定である。また、自然エネルギー利用で、風力発電装置の設置計画が進んでいる。

これらのプロジェクトをこれから官民一体となって実行する予定である。誰もが住んで見たい島、住民達が誇れる島、そんな島になって初めて東洋の真珠与論島が輝ける日が来るであろう。与論健康村としてはさらに、自給自足の島を目指し、那間地区を農業とITの地域（仮称ナマバレー）としたいと考えている。

定住者の促進を図るとともに、これからさらに与論島内外を問わず人材を養成し集めていく予定である。

（古川誠二）

薩南諸島の有人島のデータ

グループ	大隅諸島						十島			
	三島			種子島	屋久島	口之永良部島	口之島	中之島	平島	諏訪島
島名	竹島	硫黄島	黒島	種子島	屋久島	口之永良部島	口之島	中之島	平島	諏訪島
	たけしま	いおうしま	くろしま	たねがしま	やくしま	くちのちらしま	くちのしま	なかのしま	たいらしま	すけしま
行政区域	三島村	三島村	三島村	西之表市 中種子町 南種子町	上屋久町 屋久町	上屋久町	十島村	十島村	十島村	
面積 (km ²)	4.20	11.65	15.37	447.10	504.55	38.04	13.33	34.47	2.08	
周田 (km)	12.8	19.1	20.0	186.1	126.7	49.7	13.3	28.0	4.5	
標高 (m)	220	704	622	282	1,935	657	628	979	243	
人口 (95年)	119	149	245	37,271	13,426	167	177	197	85	
人口増減率 (%)	22.7	-13.9	5.2	-4.9	-1.7	1.2	-3.3	-7.9	14.9	
人口密度 (人/km ²)	28.3	12.8	15.9	83.4	26.6	4.4	13.3	5.7	40.9	
世帯数	61	77	135	14,692	5,493	90	92	101	41	
年齢構成 (%)										
0-14歳	20	17	13	19	19	8	18	13	18	
15-64歳	61	58	56	59	59	56	50	52	55	
65歳以上	19	25	31	22	22	36	32	35	27	
産業別就業人口 (%)										
農業	3	3	22	30	16	25	20	1	2	
漁業	6	8	1	2	3	10	5	7	7	
第2次産業	32	30	33	18	25	29	42	31	41	
第3次産業	59	59	44	50	56	36	33	61	50	
年間来島者	1,800	2,900	3,400	509,100	290,800	—	500	800	400	
鹿児島までの距離 (km)		108		115	135			224		
交通 (海路) 表示なしは 鹿児島発	2時間55分 (月11便)	竹島から 30分 (月11便)	硫黄島から 1時間10分 (月11便)	3時間30分	3時間50分	屋久島から 1時間40分	6時間 (週2便)	口之島から 45分 (週2便)	中之島から 1時間15分 (週2便)	
交通 (空路) 表示なしは 鹿児島発				35分 (1日5便)	40分 (1日5便)					
				大阪						

カラ列島)				奄美諸島							
之瀬島 ひせじま 上島村	悪石島 あくせきじま 十島村	小宝島 こだからじま 十島村	宝島 たからじま 十島村	奄美大島 あまみおほしま 名瀬市 龍郷町 笠利町 大和村 住用村 宇検村 瀬戸内町	加計呂麻島 かけろまじま 瀬戸内町	請島 うけしま 瀬戸内町	与路島 よろしま 瀬戸内町	喜界島 きかいじま 喜界町	徳之島 とくのしま 徳之島町 天城町 伊仙町	沖永良部島 おきのえらじま 和泊町 知名町	与論島 よろんじま 与論町
7.66	7.49	1.00	7.14	719.88	77.15	13.70	9.48	56.87	247.91	93.62	20.49
24.5	8.8	3.2	12.1	461.0	147.5	24.8	18.4	50.0	89.2	55.8	23.7
799	584	103	292	694	326	398	297	204	645	240	97
71	71	48	127	73,643	1,752	249	188	9,268	29,156	15,325	6,210
20.3	6.0	4.3	-13.6	-4.3	-6.5	-12.3	-13.8	-3.9	-6.6	-4.0	-7.4
2.6	9.5	48.0	17.8	102.3	22.7	18.2	19.8	163.0	117.6	163.7	303.1
36	42	25	65	28,486	884	125	98	3,738	11,332	5,537	2,004
22	10	23	15	21	10	9	11	18	21	20	22
68	69	56	53	59	43	44	45	53	55	55	55
10	21	21	32	20	37	47	44	29	24	25	23
12	11	24	40	6	15	34	35	28	33	41	31
5	2	3	7	3	20	1	1	1	1	1	2
37	46	21	11	26	24	24	20	24	17	14	19
46	41	52	42	65	41	41	44	47	49	44	48
400	400	400	500	618,800 380	33,300	500	500	22,500 383	166,000 468	39,200 546	79,000 590
島から 50分 (週2便)	諏訪之瀬島 から55分 (週2便)	悪石島から 1時間15分 (週2便)	小宝島から 35分 (週2便)	11時間20分	大島から 20分	大島から 55分	大島から 請島經由 1時間45分	11時間10分 (週5便)	15時間30分	17時間30分	19時間40分
			奄美大島から 3時間10分 (月2便)	東京から 37時間 (週1便)				奄美大島から 1時間 (週5便)	神戸から 34時間50分 (月5便)	神戸から 37時間 (月5便)	東京から 42時間30分 (月2便)
				神戸から 31時間 (月5便)					沖縄から 8時間30分	沖縄から 6時間	沖縄から 4時間
				沖縄から 12時間40分							
				55分 (1日6便)				1時間15分 (1日2便)	1時間 (1日2便)	1時間30分 (1日3便)	1時間50分 (1日1便)
				東京 大阪 沖縄				奄美大島から 20分 (1日3便)	奄美大島から 30分 (1日2便)	奄美大島から 30分 (1日1便)	沖縄から 40分 (1日2便)

資料：『日本の島ガイド SHIMADAS』より作成

参考文献・ホームページ

第1章

- ・鹿児島県大島支庁総務課（編）2000 「奄美群島の概要 平成11年度」鹿児島県大島支庁総務課。
- ・鹿児島県熊毛支庁（編）2000 「熊毛地域の概要 平成11年度」鹿児島県熊毛支庁。
- ・財団法人日本離島センター（編）1982 「日本島嶼一覽」財団法人日本離島センター。
- ・財団法人日本離島センター（編）1998 「日本の島ガイド SHIMADAS（シマダス）」財団法人日本離島センター。
- ・斎藤毅・他（編）1980 「トカラ列島：その自然と文化」古今書院。
- ・長澤和俊（編）1974 「奄美文化誌」西日本新聞社。
- ・離島振興30年史編纂委員会（編）1990 「離島振興三十年史」全国離島振興協議会。
- ・かごしまの島々 <http://chukakunet.pref.kagoshima.jp/home/rishinka/>

第2章

- ・鹿児島県教育委員会（編）1995 「海の道」鹿児島県。
- ・鹿児島県PTA連合会（編）2001 「鹿児島県PTA新聞」2001年4月号。
- ・鹿児島県三島村（編）2001 「広報みしま」No.343、2001年3月。
- ・鹿児島県三島村（編）2000 「鹿児島県三島村2000年度村勢要覧」三島村役場。
- ・鹿児島県三島村（編）1996 「勘九郎俊寛」三島村役場。
- ・松永守道 1972 「三島村秘史」鹿児島県。
- ・三島村誌編纂委員会（編）1990 「三島村誌」三島村役場。
- ・三島村役場（編）1994 「三島」チクマ秀版社。
- ・しましまネット <http://www.nijinet.or.jp/>
- ・三島村立片泊小・中学校 <http://www2.synapse.ne.jp/katadomari/>
- ・三島村立三島小・中学校 <http://www12.synapse.ne.jp/mishimakko/>

第3章

- ・井元正流 1999 「種子島」春苑堂出版。
- ・上野益三 1982 「薩摩博物史」島津出版会。
- ・大園純也 1981 「太平洋にかける橋（カシミア号発掘）」南日本新聞社。
- ・南日本新聞社（編）1968 「鹿児島百年（中）明治編」春苑堂書店。

第4章

- ・宮澤眞一 1993 「鹿児島異国ロマンの旅」高城書房出版。
- ・鹿児島県 1992 「屋久島環境文化村マスタープラン報告書」。
- ・鹿児島県 1996 「図説屋久島―屋久島環境文化村ガイド―」。
- ・鹿児島大学南西地域研究資料センター 1994 「屋久島」センター報告特別号第5号。
- ・鹿児島大学南西地域研究資料センター 1995 「屋久島」センター報告特別号第6号。
- ・田島康弘 2001 「屋久島における「新住民」の来住」鹿児島大学教育学部研究紀要第52巻。
- ・屋久島産業文化研究所 1986～2001「生命の島」第1巻～第55巻。
- ・屋久島フォーラム実行委員会 1994 屋久島フォーラム'94 in TOKYO 記念誌。
- ・屋久島 1993 「屋久町郷土誌 第1巻 村落誌上」。

第5章

- ・清水哲男・今村治華 1999 「吐噺へ」 渕上出版。
- ・瀬尾 央 1992 「吐噺 トカラの遠い空から」 山と溪谷社。
- ・十島村誌編集委員会（編）1995 「十島村誌」 十島村役場。
- ・南日本新聞社（編）1981 「トカラ 海と人と」誠文堂新光社。

第6章

- ・奄美宣教100周年記念誌編集部編 1992 「カトリック奄美百年」奄美宣教100周年実行委員会
- ・鮫島正道 1995 「東洋のガラバゴス：奄美の自然と生き物たち」南日本新聞社
- ・杉原 洋 2000 「開発から自立へ―奄美群島と奄振―」・石川捷治・平井一臣（編）「地域から問う国家・社会・世界」ナカニシヤ出版。
- ・高 美喜男 1997 「奄美の野鳥」「奄美の情熱情報誌ホライゾン」第6号。
- ・昇 曙夢 1949 「大奄美史」奄美社。
- ・浜田敬助 1990 「奄美の歴史」梅田印刷。
- ・松下志朗 1983 「近世奄美の支配と社会」第一書房。
- ・吉田 元 1999 「初めて奄美の自然を撮った男：下村兼史物語」「奄美の情熱情報誌ホライゾン」第10号。
- ・「奄美自然の権利訴訟：鹿地裁判決」「南日本新聞」 2001.1.23

第7章

- ・桑原季雄・尾崎孝宏（編）2000 「シマ社会の現状と諸問題—鹿児島県喜界島調査報告—」鹿児島大学法文学部文化人類学比較文明論研究室。
- ・浜田敬助 1990 「奄美の歴史」梅田印刷。
- ・昇 曙夢 1949 「大奄美史」奄美社。
- ・松下志朗 1983 「近世奄美の支配と社会」第一書房。

第8章

- ・鹿児島県大島支庁（編）1999 「平成10年度奄美農林業の動向」鹿児島県大島支庁。
- ・鹿児島県大島支庁（編）2000 「平成11年度奄美群島の概況」鹿児島県大島支庁。
- ・南西糖業株式会社社史編纂委員会（編）1997 「南西糖業30年の歩み」南西糖業株式会社。

第9章

- ・鹿児島県和泊町役場企画商水観光課（編）1992 「町制施行50周年記念町勢要覧」わどまり。
- ・小林正芳 1995 「テッポウユリ栽培の基礎」「農業技術体系 花卉編 シクラメン/球根類」第10巻 p.471-487、農山漁村文化協会。
- ・清水基夫 1987 「ユリの原種とその変種、品種」「日本のユリ」p.47-97、誠文堂新光社。
- ・西澤栄一郎・田上尙彦・合田稔行・両角和男・宇野雅美 2000 「鹿児島県沖永良部島の水、土地利用、食生活—「自足型社会」構築へ向けての予備的考察—」「島嶼研究」第1号 p.99-108。
- ・三重大学生物資源学部作物学研究室沖永良部島環境調査班（編）1994 「沖永良部島和泊町における農薬及び化学肥料施用の環境影響調査報告書」三重大学生物資源学部作物学研究室。
- ・吉村聡志・秋山邦裕 1999 「離島花き産地における生産者の出荷対応」「農—英知と進歩—」第247号 p.2-64。

第10章

- ・与論健康村ホームページ <http://village.infoweb.ne.jp/~fwbc7262/>

索引

この本に出てくる地名・人名・動植物名や自然・歴史・文化産業・行政にかかわる単語、イベントや施設を挙げています。薩南諸島の理解を深めるためのキーワード検索としてご活用ください。

ア

Iターン ……16,47,58,60
IT ……58
アイランドセラピー ……121,122
アオダイ ……56
あおのり ……103
アカココ ……41
アカヒゲ ……41,54,65,70
悪石島 ……53,61
アコウ ……41
天草諸島 ……10
アマミアラカシ ……66
奄美群島国定公園 ……97
奄美群島自然共生プラン ……17
奄美群島振興開発特別措置法 ……14,66,74,75,83
奄美諸島(群島) ……11,12,13,14,16,17,64,68,73,74,75,80,81,82,83,84,85,86,87,93,97,99,107
アマミノクロウサギ ……65,67,70
アメリカ ……10,13,40,74,125
新井白石 ……40
有園純也(ありぞのじゅんや) ……37
イースターリリー ……108
硫黄島 ……20,23,24,25,26
伊地知季安(いぢちきあん) ……82
イセエビ ……21,56
イタジイ ……66

1次予防医学 ……123
イボイモリ ……65
インターネット ……24,59,125,127
ウイルソン,アーネスト・ヘンリー ……40
ウイルソン株 ……40
ウォーキング ……123,124,127
牛 ……21,23,55,89,93,94,95,99,100
宇宙科学技術館 ……32
馬方踊り ……25
エコツーリズム ……26,45,49,97
エジンバラ公 ……66
枝手久島(えだてくじま) ……67
エネルギー ……125,127
エビ ……44,56
海老原庄蔵(えびはらしょうぞう) ……82
エラブユリ ……106,108
塩害 ……86
エンドウ ……42
大島高等女学校 ……69
大島軸 ……71,100
オーストンオオアカゲラ ……65,66,70
大隅諸島 ……11
オオトラツグミ ……66
沖縄 ……10,11,13,31,64,65,73,74,85,93,102,103,109,118
沖永良部花き流通センター ……114,115

沖永良部島 ……11,64,65,79,82,107,108,109,110,112,113,114,115

カ

海禁政策 ……73
介護 ……26,37
海上の道 ……10
カシ ……41,97
カシミア号 ……36,37
臥蛇島(かじゃじま) ……55
ガジュツ ……43,44
ガジュマル ……41
過疎 ……6,7,13,14,16,20,21,56,58,60,79,87
カツオ ……42,56
カライモ ……42
カリマタの泉 ……80
環境汚染 ……113,114
観光 ……11,20,25,26,32,35,42,43,45,49,59,60,95,100,118,120,122,123
寒小菊 ……89
韓国 ……95
鑑真(かんじん) ……12
干魃 ……86
喜界島 ……11,13,64,65,78,79,80,81,82,83,84,86,88,89

キク ……89、112
 ギネスブック ……93
 きび酢 ……123
 郷友会 ……16

 漁業 ……15、36、44、56、57、
 58、81
 金作原原生林(きんさくばる) ……66
 キンメダイ ……56
 クジャク ……25
 城(ぐすく) ……70
 口之島 ……53、54、73
 グラジオラス ……112
 クリーブランド米国大統領 ……37
 黒毛和牛 ……21、55
 黒潮 ……11、36、56
 黒島 ……11、20、21、24、25
 ケナガネズミ ……65
 ケナフ ……123
 健康づくり ……118、120、123
 遣唐使 ……12、72
 ケンムン ……72
 コウイカ ……56
 郷中(ごうじゅう) ……107
 高度経済成長 ……6、13
 高齢 ……7、14、20、26、43、
 55、60、75、79、84、88、89、
 99、100、120、121、123、127
 『古事記』 ……72
 甌島列島 ……10
 子宝島 ……53
 ゴマ ……89
 ゴミ ……6、46、47、49、60

サ

西郷隆盛 ……83、107、108

薩南諸島 ……6、10、11、12、
 13、14、15、16、17、99、118
 薩摩 ……10、13、22、34、72、
 73、74、80、82、83、97、107
 サツマイモ ……10
 薩摩焼き ……10
 里芋 ……112
 サトウキビ ……11、13、31、42、
 73、83、84、85、86、88、89、
 97、98、99、100、108、109、
 112、113
 さとうきび(砂糖)地獄 ……82、107
 砂糖専売制 ……73、82
 サバ ……44
 ザビエル、フランシスコ ……12、34
 サワラ ……56
 『三国名勝図絵』 ……42
 サンゴ礁 ……11、53、65、78、
 95、106、108、110、118
 シイ ……41、56、97
 GHQ 統治 ……72
 シイラ ……56
 JA 和泊 ……114、115
 塩 ……58、59、123
 重野安禪 ……82
 自然食 ……58、59
 シドッチ、ジョアン・バティスタ ……40
 篠川小次郎 ……33
 島おこし ……6、16、96、106、108
 島言葉(しまぐち) ……74
 島津 ……10、13、73、79、82、107
 島津久光 ……82、107
 島流し(遠島) ……82、83
 下村兼史(しもむらけんじ) ……70
 ジャガイモ(パレイショ) ……
 42、100、101、112、113

シャクナゲ ……41
 社会法 ……107
 三味線 ……124
 ジャワ島 ……98
 ジャンベ ……23、24
 俊寛(しゅんかん) ……25、80
 少子化 ……60
 鍾乳洞 ……106
 縄文杉 ……45
 人工衛星 ……31
 水産業 ……21、44、55、56、57、58
 水質汚染 ……113
 水田 ……73、97、112
 水稲 ……112
 スティーブンソン ……53
 直川智(すなおかわち) ……85
 諏訪瀬島 ……53
 製糖 ……42、85、99
 製鉄 ……34
 『西洋紀聞』 ……40
 背負い籠 ……74
 世界(自然)遺産 ……16、17、
 40、42、46、47、48
 ゼロエミッション ……46
 宣教師 ……12、34、40、68、69
 洗骨 ……74
 泉重千代(いずみしげちよ) ……93
 ソリタゴ ……112

タ

第二次世界大戦 ……13、109
 ダイビング ……95
 台風 ……11、14、17、20、36、
 56、57、86、95、99、100、107、
 111、112、124

太平洋 ……10, 11, 78
 平島 ……53
 高倉 ……11, 74
 高橋尚子(たかはしなおこ) ……95
 宝島 ……53, 58, 59
 竹島 ……20, 22, 25
 タケノコ ……21, 25
 タチバナ遺跡 ……53
 種子島 ……11, 12, 17, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37
 種子島宇宙センター ……31, 32
 種子島時彦(たねがしまときあき) ……33
 種子バサミ ……35, 36
 タブ ……41
 タモトユリ ……54
 タラソセラピー ……122
 タンカン ……42, 43, 49, 89, 101
 地下水 ……106, 113
 地下ダム ……84, 88, 89
 茶 ……43
 中国 ……12, 32, 33, 35, 72, 73, 85, 107
 中山王国 ……12
 朝鮮半島 ……10
 通信販売 ……49
 土持政照(つちもちまさてる) ……107, 108
 黒葛原兼成(つづらばるかねなり) ……43
 椿 ……21
 テッポウユリ ……108, 109, 110, 111, 112
 闘牛 ……93, 94, 95, 99
 東洋のガラバゴス ……65

吐噶喇(とから) ……11
 トカラウマ ……54
 トカラハブ ……53
 トカラヤギ ……55
 徳之島 ……11, 13, 64, 65, 71, 79, 80, 82, 93, 95, 97, 98, 99, 101, 102, 103
 十島丸 ……54, 55, 57, 58, 61
 十島村 ……11, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61
 トッピー(高速船) ……31
 トビウオ ……31, 36, 42, 44, 56
 土埋木 ……42, 44
 トライアスロン ……96
 とらの尾 ……55

ナ

中之島 ……11, 53
 名越左源太(なごやざげんた) ……82
 那覇世(なはんゆ) ……72
 南西諸島 ……10, 20, 54, 64, 65, 80, 86, 95, 99, 100, 101, 103
 『南島雑話』 ……82
 南島路 ……12
 『日本書紀』 ……72
 ネリヤ ……80
 農業 ……31, 42, 43, 55, 83, 84, 86, 87, 88, 89, 99, 100, 102, 112, 119, 127
 農業用水 ……83, 84, 106
 農業立島 ……83, 86
 ノロ ……73, 74, 81

ハ

バードウォッチング ……25

ハウス ……101, 102
 八潮踊り ……25
 バナナウル ……118, 122, 123, 124
 ハブ ……53, 71, 72, 78, 97
 浜遊び ……124
 ハマダイ ……56
 バンテイング, アイザック ……108
 東シナ海 ……10, 11, 20
 ヒトエグサ ……102
 火縄銃 ……12, 34
 ビワ ……42, 55
 風力発電 ……125, 127
 フェリー ……21, 25, 26, 54, 57, 58
 フェリス, ジョゼフ・ベルナート, 祖父 ……68, 69
 フリージア ……114
 米軍 ……79
 平家 ……80
 平家の落人 ……25, 53, 54, 80
 ホームページ ……49, 123
 圃場整備 ……84
 ボゼ(仮面神) ……53
 ボルトガル ……12, 34
 ボルトガル船 ……34
 ボンカン ……42, 43, 49
 本郷かまと ……93

マ

牧瀬刃物製作所 ……34, 35
 ママディ・ケイタ ……23, 24
 マングローブ ……11, 65
 マンゴー ……102
 ミカン ……10, 89
 操垣勁(みさおたんけい) ……108
 三島カップ ……22, 23
 三島牛 ……21, 23
 三島村 ……11, 20, 21, 22, 23,

24、25、26
水不足 ……………84
道の島……………72
源為朝 ……………80
明 ……………12、13、32、33、36
村田新八(むらたしんぱち)……
82、83
面踊り……………25
モミ……………41

ヤ

ヤクザサ……………41、43
屋久島……………11、16、17、40、41、
42、43、44、45、46、47、48、
49、65、80、101、108
屋久島環境文化研修センター……
46、49
屋久島環境文化村……………16、46
屋久島世界遺産センター……………46
屋久杉……………40、41、42、44、45、
46、47、48
屋久町立屋久杉自然館……………46
夜光貝……………56
八板金兵衛……………33
ヤマグルマ……………41
大和世(やまとゆ)……………72
家人(やんちゆう)……………73
Uターン……………58、60
郵便パック……………102
ユンヌ……………118、126
洋上アルプス……………42
ヨットレース……………22、23
米川基(よねかわもと)……………69
与論健康村……………118、120、
122、123、124、125、126、
127

与論島……………11、13、64、65、79、
18、119、121、122、123、124、125、
126、127

リ

リゾート……………25、118、122、123、125
離島振興法……………14、15、17
留学……………60、124
リュウキュウアユ……………65
琉球……………10、11、12、13、53、
64、72、73、74、79、80、81、
83、84、107、121
琉球諸島……………10、11、12、13
ルリカケス……………65、66、70
ロケット……………31、32

ワ

ワイド節……………94
倭寇……………80
渡瀬線……………11、53

執筆者紹介

- ・青山 亨(あおやま とおる)
鹿児島大学多島圏研究センター。第1章。
- ・石黒 悦爾(いしぐろ えつじ)
鹿児島大学農学部。第7章。
- ・植村 哲(うえむら さとし)
鹿児島県離島振興課(執筆当時)。現在、鹿児島県商工政策課。第1章。
- ・植村 義彦(うえむら よしひこ)
鹿児島県喜界町役場経済課。第7章。
- ・河合 溪(かわい けい)
鹿児島大学多島圏研究センター。第5章。
- ・桑原 季雄(くわはら すえお)
鹿児島大学法文学部。第6章・第7章。
- ・古川 誠二(こかわ せいじ)
鹿児島県与論町、バナウル診療所・与論健康村村長。第10章。
- ・坂田 祐介(さかた ゆうすけ)
鹿児島大学農学部。第9章。
- ・田島 康弘(たじま やすひろ)
鹿児島大学教育学部。第4章。
- ・田代啓一朗(たしろ けいいちろう)
鹿児島県沖永良部農業改良普及所。第9章。
- ・中野 和敬(なかの かずたか)
鹿児島大学多島圏研究センター。第8章。
- ・新田 栄治(にした えいじ)
鹿児島大学法文学部。第2章。
- ・野田 伸一(のだ しんいち)
鹿児島大学多島圏研究センター。はじめに・第10章。
- ・野呂 忠秀(のろ ただひで)
鹿児島大学水産学部海洋資源環境教育センター。第3章。

鹿児島大学多島圏研究センター

鹿児島大学多島圏研究センター(略称「多島研」、英語名 Research Center for the Pacific Islands)は、鹿児島大学の学内共同教育研究施設として1998年(平成10年)4月に設置された。1981年(昭和56年)に発足した南方海域研究センターを前身とし、1988年(昭和63年)には南太平洋海域研究センターへの改組を経て、現在の組織に至っている。南西諸島から東南アジア、オセアニアにかけての地域を対象として、内外の研究者とともに、小さな島々からなる海域に関わる研究や教育を行う一方で、研究機関誌『南太平洋研究』などの刊行物の発行するとともに、研究会、講演会、シンポジウムなどを開催している。ホームページは <http://cpi.sci.kagoshima-u.ac.jp/> です。

薩南諸島 21世紀への挑戦

2001年3月21日 第1版第1刷発行

編者 青山 亨
発行者 野田伸一
発行所 鹿児島大学多島圏研究センター
〒890-8580 鹿児島市郡元1-24-24
TEL (099) 285-7394
FAX (099) 285-6197
E-mail tatoken@kuasmail.kuas.kagoshima-u.ac.jp
WWW <http://cpi.sci.kagoshima-u.ac.jp/>
印刷・製本 〒870-0913 大分市松原町2-1-6 小野高速印刷株式会社

© Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands 2001
Printed in Japan

